

『音楽が救ってくれた自分』

荒川中学校 3年 北畑 希

私にとって音楽は、ただの楽しみではありません。音楽は、つらかったときにそっとそばにいてくれた大切な存在です。今まで何度も音楽に助けられてきました。今日は、その中でも特に心に残っている2つの出来事についてお話しします。

中学生になったとき、私は軽い気持ちでテニス部に入りました。運動が得意なわけではありませんでしたが、「楽しそうやし、友達も入るから」という理由で決めました。でも、部活動は思っていたよりずっと大変でした。テニス部の先生はとても厳しく、「声が小さい」と注意され、「やる気がない」と呼び出されることもありました。私は練習を頑張りましたが、なかなか上達しません。サーブはうまく入らないし、足も思うように動きませんでした。同じ時期に入った同級生たちはどんどん上達していきました。打ち方もきれいで、動きも速くてカッコいい。私はそんな仲間と自分を比べてばかりいました。レギュラーを決めることはありませんでしたが、「自分だけ下手なんじゃないか」「やっぱりテニスをやるべきじゃなかった」と思う日が増えていきました。練習に行くのが怖くなり、学校から帰るときはため息ばかり。そんなある日、家でなんとなく音楽を聴いていたとき、ヨルシカの「だから僕は音楽を辞めた」という曲に出会いました。この曲は今の自分の気持ちを表しているような歌詞で、その曲は私の心に深く響きました。朝の登校前、家に帰ってからの時間。その曲があるだけで、気持ちが少し楽になりました。「がんばっている自分も、悪くないかもしれない」と思えるようになったのです。音楽のおかげで、私は今でも部活動を続けられているのだと思っています。

もうひとつ、音楽に助けられたのは、自分の性格に悩んでいた時のことです。

私は、あまり自分から積極的に話しかけたり行動したりするのが得意ではありません。周りの友達が楽しそうに話しているときでも、どこか1歩引いて見てしまうところがあります。考えすぎて動けなかったり、失敗をおそれてチャレンジできなかったりすることもよくあります。そのくせ、ちょっとしたことですぐイライラしたり、思ってもいないことで怒ってしまうことがあります。あとから「どうしてあんな言い方をしちゃったんやろう」と反省するのに、うまくコントロールができない自分がイヤになることがありました。「私ってめんどくさい性格なんかな」「なんでこんなに不器用なんやろう」と自分を責めることが増えていきました。そんなある日、スマホで音楽を聴いていたときに出会った1曲が、

私を救ってくれました。この曲もヨルシカの「春ひさぎ」という曲です。自分の性格に向き合っているような描写で自分との葛藤のような曲でとても励まされたような感覚になりました。その日から、その曲は私の心のお守りになりました。気持ちが落ち込んだとき、イライラしてしまったとき、ひとりで不安になったとき。その曲を聴くだけで、「私は私のままでいいんだ」と少し前向きな気持ちになれました。今でも自分の性格に悩むことはあります。でも、音楽がそばにいてくれるおかげで、そんな自分も受け入れようと思えるようになってきました。

音楽は、私の心を支えてくれる大切な存在です。うまくいかない日も、落ち込んだときも、音楽がそっと寄りそってくれました。これからも、つらいことがあるかもしれませんが、でも音楽があれば、私はまた前を向いて進んでいけると思います。

